大学出版

2002.3 No.52 春

大学と社会を結ぶ知のネットワーク

ブルースの四季――春 ― 湯川新 ――表2

特集＊専門書はネットで売れるのか？

EC商品としての「本」の価値 ― 前川徹 ――2

オンライン書店は出版社のためになるのか？ ― 星野渉 ――6

ネット書店とリアル書店の間で ― 松下恒夫 ――10

出版社によるオンライン販売 ― 三浦義博 ――14

科学する目 5 雄と雌 ― 青木淳一 ――18

歩く・見る・聞く 知のネットワーク 25 廣池千九郎記念館 ――20

大学出版部ニュース ――22

製作の現場から 27 ――32

デジタル出版最前線 5 ――表3

大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

ブルースの四季　春　洪水の歌

・湯川 新・

ブルースの歌謡は、あくまで「私」の抱えたトラブルをつづる歌で、男女関係にまつわるものが過半を占めるが、季節というフィルターに照らしてみると、とくに一九二〇年代と三〇年代のブルースでは、花鳥風月の変化をめでるというよりも、過酷な「自然」の変化に翻弄されながら、それを活写する視線がうかがわれる。そして春のトラブルといえば、何よりもまずは「洪水」であった。

逆流がサムナーの至る所まで上がって、俺は線路際まで追いつめられた／逆流がサムナーの至る所を巻き込んで、哀れなチャーリーは線路際まで追いつめられた／みんなに知らせよう。逆流でこの町は全滅だ（チャーリー・パットン）。

類例のスタンザは、一九二〇年代、三〇年代に、ミシシッピー川はメンフィス以南、ニューオリンズに至る地域で活動したブルース歌手の録音に頻出する。なぜであろうか。これは、ブルースメンを輩出した風土、ミシシッピー川の中下流域と関連する問題である。

ミシシッピーは、カナダ国境に隣接のミネソタ州に端を発する傾斜はゆるやかだが流水量の多い大河で、西部からは、ミズーリ川、アーカンソー川、レッド川、東部からは、オハイオ川、ヤズー川などが合流する。この川が、ミズーリ川そしてオハイオ川の合流点以南、とりわけメンフィス以南、北緯三五度から三〇度の周辺の肥沃にして広大な農地で春になるときまって氾濫した。この地域の春の降雨量もさることながら、オハイオ川とミズーリ川の増水が天候の不具合で合致して生ずる出来事だった。

その氾濫の最大の惨事が、一九二七年四月、ミシシッピー州のグリーンヴィル付近の堤防の決壊にはじまって六週間つづいた。最大の被害者は、堤防に隣接する低地の農場に居住する、プランテーションに雇用された黒人たちであった。被害の大きさがあまりに巨大で、ブルースにはまれな伝説体の、幾多の「逆流のブルース」が登場した。

先に引用した歌手のチャーリー・パットンは自身でこれを体験したようだが、歌詞に登場するサムナーとは、ミシシッピー川に合流するヤズー川の支流、タラハッチー川に隣接する鉄道駅のある町である。この周辺は通称デルタ地域とも呼ばれて、パットンに加えて、トミー・ジョンソン、サン・ハウス、ロバート・ジョンソンをはじめとする音楽家を生み出した土地柄である。生前の彼らは周辺区域を徘徊する放浪音楽家たちであったが、レコードを通じて、北部に移動した黒人たちにも受け入れられた。当時のブルースは、レイス・レコード、つまりは黒人のための黒人の音楽だった。

（ゆかわ・あらた／音楽社会学者）

特集

専門書はネットで売れるのか？

インターネットを利用して本を買うことは、ここ数年でかなり定着してきました。

日本でオンライン書店が本格的なサービスを初めてから五年余が経過し、売上高は各社合わせて一四〇億円程度と推定されます。この金額は書籍市場の一・五％を占めるにすぎませんが、この数字以上に出版社がオンライン書店に抱く期待値は高いといえます。

とくに専門書出版社は、書店で売場を確保することが難しい現状もあり、オンライン書店を救世主としてとらえる見方があります。では現実に一定の評価と市場を確保した今、インターネットならではの本の販売傾向はあるのでしょうか。

今回の特集では、電子商取引や書籍流通の点からオンライン書店の現状を分析するとともに、読者・書店・出版社にとってのメリットについて考えてみます。専門書販売に対して、期待に応えるだけの役割を発揮しているのか、さらに大きな力を発揮するためには何が必要なのか。専門書とオンライン書店のかかわりを見直してみたいと思います。

EC商品としての「本」の価値

前川　徹（早稲田大学国際情報通信研究センター客員教授）

米国の消費者向け電子商取引の現状

二〇〇〇年三月に五〇〇〇ポイントを超えたナスダック総合株価指数は、その約一年後の二〇〇一年四月初めに一六〇〇ポイント台にまで下落した。いわゆるネットバブルの崩壊である。ドットコム企業の株価は暴落し、いくつもの上場企業が破産し、それ以上の数のネット系ベンチャーが新規株式公開の夢を実現できないまま姿を消した。また、インターネット上でそれなりのブランドを構築した企業のなかには、資金が枯渇する直前に、既存の企業に買収されたものもある。

米国の調査会社、ウェブマージャーズ（Webmergers）が毎月発表している統計によると、ドットコム企業の倒産や閉鎖はナスダック指数の下落が始まった直後の二〇〇〇年五月に一三件、六月に一七件と増えていき、二〇〇〇年一一月から二〇〇一年六月まで毎月五〇～六〇件という高い水準で推移した。この数字は、二〇〇一年末には二〇件程度まで下がっており、ドットコム企業倒産のピークは過ぎたようにみえる。二〇〇〇年一月以降に閉鎖・倒産したドットコム企業を業種別にみると、最も大きな割合を占めるのが電子商取引系の企業で、四三％を占める。

これは、米国の消費者向け電子商取引（B to C）市場が伸び悩んでいることを意味するのだろうか。

商務省センサス局が発表している小売業のオンライン販売統計によれば、調査が開始された一九九九年第4四半期のオンライン小売市場規模は五二・七億ドルであったが、二〇〇〇年第4四半期には八九億ドルまで拡大し、その後、二〇〇一年の第1～3四半期は七六億ドル、七五億ドル、七五億ドルと推移している（注＝厳密にいえば「オンライン小売市場」は「B to C市場」と同一ではない）。この数字は季節調整前の数字であり、この数字をもってオンライン小売市場が二〇〇一年に入って縮小していると結論することはできないが、前年同期と比較すると、その増加率は、

二〇〇〇年第4四半期の六九％から、二〇〇一年第1四半期は三七％、第2四半期は二五％、第3四半期は八％と減少しており、米国の小売業における電子商取引市場の拡大スピードが落ちているのは間違いない。

しかし、民間調査機関のコムスコア・ネットワークス（comScore Networks）によるB to C市場に関する調査をみると、九月一一日に発生した同時多発テロ事件の影響を受けて九月中旬から一〇月にかけて売上は事件以前の水準を下回ったが、その後順調に回復している。また、二〇〇一年一二月一九日にIDCが発表した調査結果によれば、二〇〇一年のホリディシーズンのB to C市場規模は、前年比四九％増の二六〇億ドルに達している。

調査会社によってB to C市場の定義が微妙に異なるので他の市場推計値と比較はできないのだが、eマーケッター（eMarketer）は、二〇〇一年七月に北米のB to C市場は二〇〇四年には一九七九億ドルに達するという予測を発表している。

書籍市場とアマゾン・コム

この拡大するB to C市場のなかで比較的早くから注目されていた分野の一つが書籍市場である。特に、一九九五年七月にビジネスを開始したアマゾン・コムは、一〇〇万種類を超える書籍を取り扱っていることでマスメディアの注目を浴び、その売上高は、一九九六年の一五七〇万ドルから、二〇〇〇年にはその一七〇倍以上の約二八億ドルにまで急増している。ただし、現在アマゾン・コムが取り扱っている商品は、書籍だけではなく、音楽CD、ビデオから玩具、自動車、旅行サービスにまで拡大しており、ネット上での書籍の売上が二八億ドルになっているわけではない。二〇〇〇年の決算報告書によれば、米国内の書籍・音楽CD・ビデオ部門の売上は約一七億ドルである。

書籍は、比較的ネット販売に適した商品であるといわれてはいるものの、書籍市場全体に占めるネット上の市場の割合はまだそれほど大きくない。たとえば、二〇〇一年四月一六日付けのウェブ版のニューヨーク・タイムズ紙に掲載された“Sales Growth in Books Online Is Leveling Off”という記事によれば、ネット上での書籍の売上は、市場全体の約七％程度で頭打ち状態になっているという。また、この記事中で、アマゾン・コムの創業者で会長のジェフ・ベゾス氏は「いつかオンラインでの書籍販売額は、書籍市場の一五％に達するだろう」と語り、全米第二位の書店チェーンであるボーダーズ・グループのCEOは「オンライン書籍販売市場は、書籍市場の一〇％でその成長が止まるだろう」と述べている。

アマゾン・コムの売上高が爆発的に拡大していた一九九〇年代の後半には、書籍市場の大半がネット上に移行し、街角の書店のほとんどがなくなってしまうのではないかと思われたのだが、どうやらそうではないらしい。

なぜオンライン書店で本を買うのか

日本における書籍のネット販売が書籍市場全体に占める割合は、米国よりはるかに小さいだろう。寡聞にして、そのような統計や推計値は知らないが、多めにみても一～二％程度だと思う。ただ、私の知人は古くからのインターネット利用者が多いこともあり、ネットで書籍を購入している人がかなりいる。たとえば、近所に書店がなく、本を買うためにバスや電車などの交通機関を利用せざるをえないところに住んでいる知人は、オンライン書店の常連である。

無論、オンライン書店を利用する理由は人それぞれ異なるが、すぐに思いつく理由を整理すると次のようになる。

(1) 書店に行く時間や費用を節約できる

前述の知人のように近所に書店がない人にとっては、書店に行くまでの時間と費用を省くことができる。

(2) 本を探す時間を節約できる

ベストセラーの本ならすぐにみつけることができるが、そうでない本を（特に大型書店で）探すのは案外時間がかかる（場合によっては、書店になくて取り寄せになることもある）。したがって、買いたい本が決まっていれば、ネットで購入した方が時間の節約になる。

(3) 書店でも取り寄せになるような本はネット上で購入した方が便利

書店に在庫がない本は取り寄せを依頼することになるが、この場合、本を受け取るために再度書店まで足を運ばなければならない。それならば、最初からネットで購入した方が便利である。

(4) 持って帰らなくてよい

特に分厚い本を買うときやまとめて何冊か購入する場合、ネット上で購入すれば、重い荷物を持って歩かなくて済む。

(5) 現実の書店では購入しづらい本を買うことができる。

たとえば、顔見知りの店員のいる書店では購入をためらうような本であっても、ネット上でなら平気で購入することができる。

また、米国の場合には、再販制度がないためにネット上の方が価格が安いというメリットもある。

日本のB to C市場が米国に比べて未発達である最大の理由は、電話の従量制料金にあると考えられるが、日本でも通信料金を気にせずにインターネットが利用できる常時・定額接続が急速に普及しつつあるので、間違いなくインターネットで買い物をする消費者は増加し、書籍のネット販売額も増えていくだろう。ちなみに、米国ではオンライン書店の登場によって、書籍市場が拡大したと言われている。五年連続で市場が縮小している日本の出版界にとって、書籍のオンライン販売は救世主となるのかもしれない。

オンライン書店と学術専門書

オンライン書店をよく利用している人は、現実の書店で本を買わないわけではない。少なくとも私は現実の書店で

も本をよく購入する。たとえば、すぐに読みたい本の場合は現実の書店で購入することが多い。オンライン書店で購入しても、在庫さえあれば翌日か翌々日には届くのだが、それが待ちきれない場合がある。また、特定の書籍を探しているわけではないが、ぶらりと書店に入って目に留まった本をぱらぱらとめくり、気に入った本を購入することもある。

現実の書店で購入して失敗したと思う本は皆無だが、ネット上で購入して本が届いた後で購入しなければよかったと後悔した本が何冊かある。想像していた内容と異なっていたり、期待をしていた水準の本ではなかったからである。それは購入時点で本の内容やレベルを確認できなかったことに原因がある。そして、購入して後悔した本の多くは比較的高価な学術専門書の類なのである。

学術専門書は「なぜオンライン書店で本を買うのか」で挙げた(2)〜(4)の理由に該当する本が多い。大型書店で探すのに苦労するし、みつからない場合も多々ある。分厚くて重い専門書も少なくない。にもかかわらず、私が最近ネット上であまり学術専門書を購入しない原因は、ここにある。

現実の書店の場合、本を手にとって内容を確かめることができるが、オンライン書店の場合にはそうはいかない。オンライン書店の多くは本のレビューを掲載しているから、それを読めばおおよそのことはわかるのではないかと反論されそうだが、学術専門書の場合、十分なレビューが掲載されている書籍はきわめて少ない。せめて本の目次と数ページ分のサンプルを画面で確認できればよいのだが、そんなサービスをしているオンライン書店は日本にはまだない（オンライン販売をしている出版社のなかには、目次や本の内容を詳細に紹介しているところもあるのだが、いわゆるオンライン書店にはない）。

米国のアマゾン・コムは、二〇〇一年一二月から「ルック・インサイド」というサービスを始めている。すべての書籍ではないのだが、「ルック・インサイド」マークのついた本は、本の内容を数ページから多いもので数十ページにわたって確認できるのである。これで、オンライン書店でも、ちょっと気になる本をパラパラとめくってみて、購入に値するかどうかを判断できる。もちろん、こうしたデータを整備するにはコストがかかる。しかし、オンラインで本の内容を（一部とはいえ）確認できることによって、売上も伸びるに違いない。日本のオンライン書店も学術専門書の出版社と協力して、ネット上で本の内容を確認できるサービスを始めてくれると嬉しいのだが……。

オンライン書店は出版社のためになるのか？

星野　渉（文化通信）

既存の書籍流通とは矛盾するオンライン書店

逆説めいた言い方になるが、そもそもオンライン書店は専門書出版社、いやそれ以前に出版社のためになるのだろうか。この新業態、実は出版社のためにはならない、正確には現在の日本の出版社が依存している仕組みとは相反する原理を持っているように思う。

オンライン書店が従来型書店と違う特徴は、当たり前のことだがインターネットを利用している点である。これまでにも書籍を電話、ＦＡＸで受注して、宅配便で届ける書籍通信販売はあった。ヤマト運輸と栗田出版販売の合弁企業で、最近ではインターネットでの受注が全体の半数近くになってオンライン書店とも呼ばれるようになったブックサービスは、一九八六年から書籍通販業務を続け、年商五〇億円まで成長している。

しかし、地方から電話で注文する場合には、やはり利用者は幾分の緊張を強いられるし、ＦＡＸは送ってしまえば後はわからない郵便と同じだ。しかも通話料がかかる。いくら居ながらに注文できるとしても、精神的・経済的な距離を感じざるをえない。その点、インターネットは送り手と受け手がはっきり分かれていた従来型の通販に比べて顧客に距離を感じさせない。

この特徴は、川上主導で動いてきた出版流通と根本的に矛盾する。これまでの書籍流通は「配本」が基本だった。小売店にとってみればまさに「天の差配」であり、独自の品揃えや個性的な店づくりなど、よほど恵まれた環境にあるか、利益を度外視した努力でもしないかぎり許されない仕組みである。これに対してオンライン書店は、消費者と出版社を隔てる距離を縮めてしまう。このことは既存の書籍流通に革命的な変化を迫る。実際、既存のシステムを象徴してきた大手取次各社が、オンライン書店の登場以来、出版不況への対応もあって急激に川上主導型流通からの転換を図っていることにも、その影響の一担が現れている。

オンライン書店での本の売れ方

現状をみると、丸善、紀伊國屋書店、文教堂といった大手書店が中心になって進んできたオンライン書店の世界も、二〇〇〇年にはBOL、bk1、Amazon.co.jpが参入して現在のプレイヤーが出そろった。ところが翌二〇〇一年にはBOLの撤退や、オンライン書店同士の提携が進むなど、すでに一部では再編淘汰の動きも出てきている。そうしたなかで、各社の得意ジャンルや販売方法などの特徴が明確になってきた。

オンライン書店の数は小規模サイトまで含めると相当数に上るとみられるが、ここでは主要業者の販売状況からオンライン書店がもつ可能性をみる。

世界トップブランドとして上陸したAmazon.co.jpは、米国をはじめとした各国で培った斬新な販売方法を日本でも展開しているが、なかでも最も特徴的な販促ツールは一時間ごとに更新されるベスト一〇〇リストだ。

このリストは過去二四時間の販売実数で更新されるので、たとえば新聞の書評やテレビ番組で取り上げられると、その本が一時間後には顔を出すといったことも珍しくない。しかも、このリストは利用者にとって購入の指標の一つになっているので、登場した本が相乗効果でどんどん順位を上げることもある。

これまで取次や書店が発表してきたベストリストは、一週間前や一カ月前の過去情報だった。大手書店や大手取次のベスト一〇はたいてい同じ顔ぶれで、マス市場に受け入れられた本のリストを示しているにすぎなかった。そういう意味で、リアルタイムに更新されるベストリストは、初めて市場の動きをビビッドに伝える情報だった。だから顧客にとっては購入の指標となり、それ自体がメディアの機能を発揮する。

さらに、リストに登場した本には購入者によるレビューがつくことも多い。レビューの評価はけっして肯定的なものばかりではなく、その内容が売れ行きにプラス・マイナスの影響を与える。また、ベスト一〇〇に登場するために一時間内に販売しなければならない冊数はそれほど多量ではないというが、その順位を維持するのは、その本の実力次第になる。もちろんAmazonではお奨め商品の紹介などの仕掛けを積極的に行っているが、リストに出版社やAmazonが介在することはできない。

こうした手法は、従来のように小売店やメーカーが市場の動きをみきわめて陳列すべき商品を選択するのではなく、書店としての判断は最低限に抑え、市場の動きや消費者の評価をどれだけリアルタイムに顧客に伝えるのかという点に力を入れた販促といえる。この方法は書籍販売の手法としてはきわめて異例であるが、すでにいくつかの成功事例がその有効性を証明しはじめている。

これとは逆の方法論を展開しているのがbk1だ。同社は日本の書籍流通を変革するという明確な目標をもった石

井昭氏（元図書館流通センター社長）が創業し、それに呼応する人材が参集している。彼らにとって改革すべき対象は、自主的な仕入れが許されない現在の書店であり、リアル書店では実現できなかったことをオンラインで実現しようとしている。だから、Web上ではむしろ積極的に商品紹介を行い、事前受注や直接仕入れといったこれまでの書店では難しかった方法で、個性的な品揃えを展開しようとしている。

東京・千駄木で往来堂書店という二〇坪の個性的な書店を開き、その後bk1の店長に転身した安藤哲也氏は、昨年、bk1サイトの中に「ブックス安藤」というセレクトショップを開店した。安藤氏は二〇〇一年一二月に出した『本屋はサイコー！』（新潮OH文庫）でそのコンセプトについて述べているが、インターネットというツールがもつニッチ性に着目した発想だといえる。

リアル店舗でニッチな指向をもつ人々に向けた品揃えをしても、限られた商圏のなかに対象となる顧客の数はそれほど多くない。よほど全国に知られ、わざわざ遠方から購入しに来る顧客でもいなければ、とても経営は成り立たない。しかしオンライン書店ならば、全国、いや全世界に散らばるニッチな需要を集中させて経営を成り立たせるビジネスモデルが可能かもしれない。それがbk1のコンセプトになっている。

リアル店舗の在庫を利用することで、強力な商品調達力をもつ紀伊國屋書店Book Webの場合、売れ方はほぼ店舗と同様だというが、人文・社会科学系の書籍の売れ行きの裾野が広いという。これは在庫量と関係しているだろう。同書店は主要店舗の単品管理在庫をウェブで公開する「ハイブリッドWebサービス」を行っているため、他のオンライン書店のデータベースに比べて、既刊書など幅広くて豊富な商品を「在庫あり」の状態で販売できる点が強みになっている。データベースに表示される在庫状況も、実はオンライン書店にとっては重要な販促ツールなのだ。

三社の販売方法は違うようにみえるが、実は「小さな需要を顕在化する」という点では共通している。普通なら全国に点在する書店店頭で同じ本が一冊ずつ売れたとしても、そのことが出版社に伝わるには相当な時間がかかるし、ましてや消費者にその情報が伝わることなどありえない。しかし、オンライン書店の場合は、この情報を販促に生かすことが可能であり、出版社や利用者にリアルタイムに伝えるツールも持っている。

専門書販売にとってオンライン書店がもつ能力というのは、こうした潜在需要の掘り起こしにある。そして、潜在需要を掘り起こし、それが出版社の在庫管理や生産の体制にまで影響を及ぼしてゆくであろうことが、オンライン書店の革命性なのである。

オンライン書店はまだ力を発揮していない

ただ、現時点でオンライン書店は本来の力を発揮していない。その革命性を考えれば、まだまだこんなものではないはずだ。

力を発揮できない理由はいくつかある。その一つはインターネットの利用環境がまだ整っていないということだ。ようやくブロードバンドが整いつつあるといっても、まだ多くの家庭は通常回線かＩＳＤＮでのダイアルアップ接続であり、リアル書店で考えれば、自動ドアが開くまで数分待たされるような感覚だ。これではとても日常的には使えない。少なくとも職場や家庭で常時接続が実現されなければ、「書店」とはいえない。

この問題は出版界の手には負えないが、もう一つの理由は出版社の対応次第である。それは、「データベース」と「在庫」の問題だ。

現在各社が利用しているデータベースは、取引取次が作成したものが中心だ。このデータベースには基本情報はあるが、内容紹介などは乏しく、在庫の有無は一部の単品管理在庫しかわからない。そのため主要オンライン書店は日本書籍出版協会（書協）の「書籍データベース」を購入している。出版社が事前刊行情報や絶版（品切れ重版未定）情報を更新するためだが、こうした更新がなされるデータはまだ新刊書籍の半数程度しかない。

書協のデータベースは、二〇〇二年四月から書店、取次、図書館の団体とともに設立する中間法人に移管されることになっているが、多くの出版社がデータ更新に参加するかどうかに成否がかかっている。

一方の在庫問題とは、オンライン書店がリアル書店と同様の従来型流通システムに依存していることから発生する。インターネットで受注情報が電子的に処理されたとしても、取引取次に在庫がない場合は結局、多くの場合、いまでも短冊で発注されている。これでは正確な在庫表示は不可能だ。

当然、今後オンライン書店は出版社との直取引などを拡大するだろうが、それは大量に仕入れることで良い取引条件を引き出せるような場合であり、単品のオーダーはやはり卸機能に依存する。しかし、現在の取次は回転率の悪い大量の在庫を抱えはしない。迅速に単品の発注に応えるためには、多くの出版社の在庫を単品管理して、注文に応じて出荷できる共同倉庫のような流通システムが必要になる。

出版社がこのようなインフラ整備までしなければならないことに違和感を覚える方もあるかもしれないが、これが書籍流通を市場に合わせていくパラダイム変化に他ならない。オンライン書店によって書籍出版社が新たな販路を開拓するためには、既存流通と矛盾するオンライン書店に荷担して、自らの手で新しい流通インフラをつくることが必要なのではないだろうか。

ネット書店とリアル書店の間で

松下 恒夫（三省堂書店ネット事業部）

在庫僅少本をネットで売る試み

三省堂書店のインターネット部門である「ブックサイト三省堂」では、二〇〇〇年九月よりネット上で在庫僅少本フェアを行っている。一般的に、版元で在庫僅少になった書籍はリストから落ちるため、入手が難しい。しかし今回のフェアでは、それらの在庫を当社の流通センターに用意し、受注後即時出荷を試みたのである。

オンライン書店では「書誌データベース」から検索し、在庫の可能性があれば「買物かご」に入れられるような仕組みが一般的だろう。しかし今回のケースでは「書誌データベース」は利用できないため、システムにあらかじめ用意した「書籍以外商品（ノンブック）」を受注する仕組みを応用する方法をとっている。出版社より出荷されたアイテムを分野別一覧表にし、表につけた「買物かご」ボタンから購入するというものである。

今回のフェアは、アクセスした方にサイト独自の商品を提供する企画でもあり、かなり高い期待がかかっていた。

しかし、当初は目新しさもあって毎日のようにあった受注だが、時間が経つにつれ商品を入れ替えても販売に結びつかなくなる。結局、最終的な出荷冊数に対する売上比率は、東京大学出版会が第一弾と第二弾をあわせて二三%、大学出版部協会加盟の版元二三社による第一弾は一一%、同じく一六社による第二弾は五%の販売にとどまった。商品を倉庫の奥から出品した版元、そしてそれを保管し出荷し、またページの作成・管理を行ったわれわれの手間にみあう売上とはならなかったといっていいかもしれない。

ネット書店にヒラバは必要か?

このたびの「在庫僅少本フェア」は、われわれが「ヒラバ」と呼んでいるスペースでの企画だった。「ヒラバ」は百貨店等では、特定のブランドだけではなく、セーターならセーターという括りで、さまざまなサイズやカラーの品

右／三省堂書店トップページ（http://www.books-sanseido.co.jp/）
左／在庫僅少本分野別選択画面（http://www.books-sanseido.co.jp/promo/daigaku/list_bunya.html）

揃えをしている構成をいう。百貨店において、ブランド等の違いに必ずしも拘らない「ヒラバ」は本来有力な売場である。

ホームページ上の「ヒラバ」は、何らかのリンクを辿ってホームページを訪ねてきた方が、サイト内に長時間とどまり、その結果できれば一点でも多く商品を購入していただくためにある。ナビゲーションや検索窓以外に商品情報を掲載した場所で、在庫僅少本フェアもその有力な企画の一つだった。

しかし、ネット書店において「ヒラバ」は必ずしも有力な売場ではないような気もする。定期的に訪れる利用者の多くが、「お奨め」がなくとも自分で検索し、そのまま買物手続きを済ませていくのが実態で、「お奨め」は作成する手間ほどには機能していないというのが現実かもしれない。

しかし、検索から先の商品手配において大きな差が出にくいネット書店では、唯一、独自性を出し得るのがヒラバともいえる。定価販売、二大取次寡占の元で「金太郎書店」と揶揄されるリアル書店が、たとえ独自フェアを企画してもあまり売上には結びつかない現状と、どこか姿がダブってみえはしまいか。

専門書はネットで売れるか？

専門書をネット上で販売するにあたって、いくつか考えられる問題点をあげてみよう。

(1) 検索の問題　都市部に増えてきたメガ書店では、目当てのコーナーにたどりつくのに苦労させられるケースが多々あるが、品揃えではメガ書店以上ともいえるオンライン書店で、目当ての書籍にたどりつくことはなおさら容易ではない。

オンライン書店の多くはディレクト型やキーワード型の検索機能を備え、目的の書籍に絞り込んだところで買物かごに入れるという流れをたどる。作者やタイトルに含まれるキーワードがわかっていれば検索そのものは苦にならないだろう。だが、何も手がかりがない、思いつかない、あ

るいは思い描いたキーワードで何もヒットしなかった場合は、あらゆる言葉を片っ端から検索窓に放り込んでいかなければならない。時間のないときなど、これはかなりの苦痛を伴う作業だろう。回線の状況や利用時間帯によっては結果の表示に時間がかかったり、内容によっては検索のためのコツが必要な場合もある。また、誤字・脱字があっても検索結果は大きく変わってくるので、的確な検索には慣れが必要である。

どのようなキーワードならば書籍が出版されているのか、実際にそのキーワードに該当する書籍が全体でどのくらいのボリュームなのか、新しい情報があるのか否か、さらにはトレンドは何か。書店の店頭では書架の間を注意深く歩けば、それら有形無形の情報を入手することができるが、オンライン書店でそれらを入手することは困難だろう。

(2) 流通の問題　よく、専門書販売こそオンライン書店向きだといわれる。通常は書店に並ばないタイトルが検索で探し出せるから、だそうだ。しかし、専門書においては、たとえ検索でヒットしても、そのタイトルの入手の困難さはリアル書店と大差がない、というのが実情ではないだろうか。検索結果に在庫の有無や、配達日数の目安が表示されるのはほとんどが一般書であり、検索でヒットしたからといって、それが本当に入手できるかどうかは注文してみなければわからないことも珍しくない。

実際に注文してみても「在庫なし」のメールがくるだけ、というのでは検索した意味がない、とお叱りを受けることもある。他の商材ではネット上に在庫表示を「あと○個」まで表示し、在庫のあるものだけ、あるいは入手可能なものだけを「買物かご」に入れることができる、という当たり前のことが書籍業界ではまだ実現していないのである。

またオンライン書店であっても、手元に在庫がなければ書籍は従来の客注品とほぼ同じ、複雑な流通経路をたどることになる。これでは時間もかかるし、さらにはオンライン書店上ではたいていの場合は、消費者が送料までも負担しなければならない。

コンビニエンスストアや駅の売店など、宅配以外での受け渡しもまだまだ模索段階である。当ブックサイト三省堂では、小田急電鉄の駅売店やＪＲ東日本のコンビニエンスでの書籍受け取りサービスを実施し、手数料を無料として好評を得ていたが、これではたんに送料の持ち出しである。ｂｋ１との提携を機に有料化に踏み切ると、それら受け渡しの件数は激減し、なぜ有料にするのか、と多数のお叱りを頂戴した。これは、宅配以外の方法で受け取りができるという利便性よりも、送料が無料であるという面で支持されていただけであり、平均で数千円の商品でなければ送料の割高感が否定できないということだろう。

(3) 著作権廻り　あらゆるデータもデジタルな形にしてしまえば、その配布やコピーは媒体の枠から自由になる。しかし、それを野放図にしておけば、著作権を脅かすこと

になるのはどの分野でも同じだろう。

書籍販売は、媒体である紙のコピーしやすいという特性から、その対策に頭を悩ませてきた。書籍業界は、コピー一枚の単価よりは書籍を買った方が安いというコスト構造により、かろうじて命脈を保ってきたのかもしれない。しかし、デジタル化されたテキストは一瞬にして数千、数万のコピーを生み出す可能性を秘めている。メールマガジンなどはその典型だといえるだろう。「デジタルブック」「電子ブック」など、当時の最先端の技術をもってしても、いまだ解決できていないのが、著作者の権利を保護しつつ「立ち読み」を許す技術ではなかっただろうか。

これからのオンライン書店

毎日の仕事でさえメールがなければ何も始まらない、と考える方々も多い昨今だが、そのような状況になったのはほんのここ数年のことにすぎないのではないだろうか。数年前までメールといえば「パソコン通信」という閉じた世界のそれだったし、オンライン書店で必須の装備である書誌データベースも有料が当たり前だった。

オンライン書店も、ある程度は「使える」購買チャンネルとして定着してきたといえるだろう。しかしその実は、Windows95 のリリース前後からの、実に短い期間で、大急ぎで達成されてきたもののように思えてならない。検索データベースの充実、書籍のお奨め機能、支払い方法や配送方法の多様化、セキュリティの問題など、一定の進化をみせたようであっても、「まだまだ使ったこともないよ」という方が大多数ではないだろうか。「そんなものよりも本屋に行った方が早い」とお考えの方も多いだろうと思う。

またリアル書店にできる細かなサービスが、オンライン書店ではシステムやコスト面から欠落している。特定書籍の大量購入や、法人対応、各種書類の発行、定期刊行物の取り扱いなどがそれに当たるだろう。

どのように電子メディアが発達しようとも、圧倒的に優位な面をもつ紙の媒体「書籍」はなくなることはないが、その普及にネットをもっと活用することは可能である。

しかし、手持ちに一円の現金がなくとも入店でき、持ち帰ること以外はすべて許容してきたのがリアル書店ならば、そのフルサービスをネット上で実現するためには、まだまだ時間がかかりそうである。

オンライン書店が発展途上ならば、いまのところ「書店」を上手に使うためにオンライン書店とリアル書店の良いところを合わせて使うのがよいとわれわれは考えている。

二〇〇一年一一月より稼動している神田本店の「お取り置きリクエストサービス」もその一環で、書籍の検索と在庫確認はネット上でしていただくものの、その購入の可否は店頭でお客様に決めていただくこともできる。在庫の引き当ての精度やタイミング等で、いくつか改善を図るべき点もあるが、ぜひご利用いただきたいサービスである。

出版社によるオンライン販売

三浦 義博（東海大学出版会）

ウェブ開設満二周年

東海大学出版会のホームページ「太陽の東　月の西」は「在庫商品の書店化」を目的として一九九九年に開設された。そのきっかけとなったのは一九九七年の書協の「Books」である。

Booksのウェブ検索と連動しながら独自のウェブサイトを開設すべく、五名による作業部会を立ち上げて準備にかかったのであるが、作業部会からはウェブ出版の可能性を探りたい、ウェブPR誌を出したい、友の会組織をつくりたい、刊行書目すべての完全な書誌情報をデータベース化したい、直販体制をつくりたいなどの要求が寄せられた。そのすべての要望を盛り込んだ最大限に欲張りなウェブサイトの開設を目指すこととなったのだが、これらの要望を満たすための作業はけっして簡単ではなかった。休日・祭日を挿んだ半徹夜の泊まり込み作業を何度も行い、五名の作業部会員の熱意に支えられ、一年がかりでようやく掲載書誌データの基礎が整えられたのである。

大学出版部には、高額・少部数であるがゆえに、また一般読者向けではないがゆえに、読者との出会いの場を充分に得られずに在庫されている学術専門書が多くある。従来型の流通システムでは如何ともしがたいこれらの書籍も、インターネットという器を使えば、書店の平積み効果が演出できる。ウェブサイトに販売機能を付加して物流システムを導入すれば、読者への翌日配送も可能である。

東海大学出版会にとって、ウェブサイトの開設は新たな販売チャンネルが一つ増えることを意味するビジネスチャンスと映ったのである。その実現のために、受発注業務を外部委託してウェブサイト専用の小さな在庫倉庫を設置し、「在庫商品の書店化」という目的に直販機能を付加したのである。

開設二年目を迎え、所期の成果が具体的にみえ始めるようになった小会のウェブサイトは、二〇〇二年五月にはリ

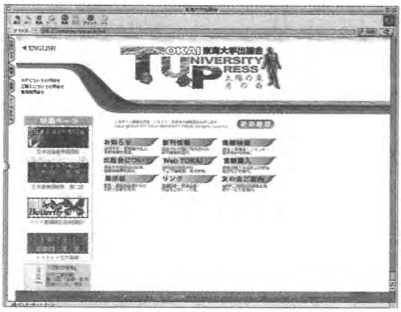
ニューアルを予定している。この二年間の反省点を改善し、販売に力点を置いたウェブサイトへの再構築を図るが、実験的な試みも予定している。

ウェブ注文のさまざまな形

開設以来丸二年を経過した東海大学出版会のウェブサイト販売は、いまだ自慢するほどの赫々たる成果とはいえないが、販売部数・売上金額ともに、緩やかな右肩上がりを示しながら増加している。

開設から半年間の注文数は毎月一桁で推移し、意気込みは落胆に変わったものだが、やがて一〇冊台、二〇冊台、そして三〇冊台へと月別の販売冊数は着実に増加し、開設以来のバスケット注文総数は六五二冊、売上総金額は三六〇万円となった。バスケット注文の対前年比をみると、売上高が一六九%、アクセス件数は一五三%という増加を示している。

この数字はウェブサイト上のバスケット注文だけであるが、海外販売についても紹介しておきたい。



東海大学出版会　ウェブサイト
http://www.press.tokai.ac.jp/top/

二〇〇〇年一二月二七日以来、ウェブサイトに海外からの問い合わせが入るようになってきた。英文版ウェブサイトに掲載した図鑑への問い合わせである。いまにして思えば「黒船襲来」に等しきものであった。仕事納めの日に海外の読者、書店、代理店とのメールによる直接販売が突然ウェブサイト上で始まったのである。年度が替わり、仕事始めの日にウェブサイトを開けると、ドイツ、オランダ、アメリカ、イタリア、ブラジルなどから次々に問い合わせと条件交渉が入っている。

軽い眩暈に似た感覚を覚えながら、初めて経験する海外からの条件交渉に応じ始めると、そこは寸分の妥協も許さぬ「商取引」の世界であり、再販制と委託販売制度そして卸正味という予定調和の世界で販売活動をしてきたわれわれにとっては未知の世界であった。悪戦苦闘の海外との直接取引は一年を経過するが、販売部数にして約二〇〇冊、金額にして四二〇万円の売上を記録していることに驚いている。

この経験は英文出版物を有する大学出版部にとって、販路が海外にも確実に存在すること、販売代理店に頼らなくても自社ルートで販売できること、さらには独自にディスカウント率を設定できることなど、ウェブサイトそのものが代理店機能と販路の道筋そのものを持つことを教えてくれた。しかも決済はカードであり、ドル換算の必要もなく、円で即入金というのは魅力的である。

東海大学出版会は今春に英文図鑑“Fishes of Japan with pictorial keys to the species, English edition”を出版する（「大学出版部ニュース」『大学出版』五二号、二五頁参照）。この経験により海外への販売にかすかな自信と希望をもち始めている。「捕らぬ狸の皮算用」となるかどうかは結果が教えてくれるだろう。

ウェブ注文の形態はこの他にウェブサイトに掲載された注文書をダウンロードしてＦＡＸで申し込んでくる場合（公費購入の場合が多い）、ウェブサイトをみたうえで電話注文をしてくる場合など、上記のバスケット注文とウェブから取り出したメール販売を合わせ、四つの注文形態がみられる。

この四注文形態の二年間の通算売上金額はほぼ一千万円である。小会の年間売上に占める比率はまだ二％ほどにすぎないが、「愚公山を移す」気長さで、開設当初の到達目標値である、年間売上の一〇％を目指す。

ウェブサイトの課題

第五回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー報告のなかで、私は一九九七年の書協の「Books」開設を日本の出版業界にとっての「インターネット元年」と位置づけたが、それ以降の版元、書店、流通それぞれによる急激なサイトの開設は、あたかも書店に多種多様な書籍が陳列されているのと同じ競合・競争状況を引き起こしていると いえる。各出版部のウェブサイトがさまざまなウェブサイトのなかに埋没することなく、本来の目的を全うさせるために、今後なすべきことは、他のサイトとは一味違った、版元の個性を主張するようなサイトへの移行であろう。各版元の出版傾向や特徴を強調した、あるいは付加価値をもったウェブサイトの再構築である。優れた学術専門書と良書の出版を維持するためには、魅力ある本づくりと併行して魅力あるサイトづくりが求められる時代にいるのである。そして何より重要なことは、ウェブサイトを用いて販売体制の充実・強化を図ることであろう。

不幸にして現実となってしまった鈴木書店の破綻を契機に、その思いを強くしている方も多いと思う。出版界の売上高も五年連続で前年割れが確実なようである。その一方で書籍の新刊点数は増加し、七万点に達しそうな勢いである。

商業出版社の売れ筋商品とは異なる学術専門書を多くもちながら、既存の流通機構のなかでは販売と普及に限界を感じ続けてきたわれわれにとって、これらの現実を座視しながら売上の不振を嘆いてばかりではいられないだろう。自らの手で事態を変えてゆくときに来ているとはいえないだろうか。

鈴木書店の破綻は単に経済不況下で起きた出来事といいきれるだろうか。「戦後の出版業界を支えてきた枠組みに構造変化が進行し、それが不況という荒波によって根こそ

ぎにされた」結果といえるのではないだろうか。構造変化とは、ウェブ販売、インターネット出版、再販制の弾力運用、複写権問題、電子図書館、少子化と大学改革など、この十年の間に生起した変化を意味しているが、これらのすべてが複合的に作用し、出版業界の売上低迷、そして鈴木書店の破綻へと至ったのではないだろうか。鈴木書店破綻の原因については、業界の識者の方々がさまざまに論じているがいまひとつ腑に落ちない、納得しきれない、というのが正直な感想である。

誤解を承知の上でいえば、鈴木問題の根本には、「再販制と委託販売制度そして卸正味という予定調和」の世界に安穏とし、消費者と面と向かうことを忘れ、流通と書店に販売を依存しつづけた版元側の「姿勢」があるのかもしれない。もしそうであれば、いまわれわれが取り組むべきは、自社販売体制の確立であろう。流通・書店とは従来どおりの関係を維持しつつ、一方で直販による自社販売体制を構築していくことは、インターネット時代のいまであれば十分にできることであろう。またそれがウェブ販売の最大のメリットである。「版元の個性を主張するようなサイトへの移行」とはこのような意味合いにおいて必要なのである。

「いま読みたい、すぐに購入したい」読者にすぐに販売できる体制をつくるということは、「再販制と委託販売制度そして卸正味という予定調和の世界」から一歩踏み出す、という意味合いにおいて重要なのである。これに対しては「取次店や書店の売上を横取りする」式の意見が必ず出てくるが、現実はその逆ではないかと思う。大学出版部こそがウェブ販売向きの書籍を多くもち、各種学会や各研究機関など、書店以外に第一次読者がいる場合が多々あるからである。新刊委託による流通依存だけではなく自社販売体制をつくりあげていくことは、出版業界の課題である「返品対策」の一助ともなりうる。読者がどのルートで書籍を購入するかは読者の判断しだいである。書店の場合もあれば、ウェブ注文の場合もある。われわれがウェブ販売によって販売のチャンネルを一つ増やすように、読者にとっても購入の選択肢が一つ増えるだけである。

そしてウェブサイト販売のもう一つの可能性は「共同販売」ではないだろうか。ウェブサイトの管理運営には人的な労力と経費が伴い、すべての出版部が横一線に並んでウェブサイトを運営できる状況にあるとはいいがたい。しかし複数の出版部が一つのサイト上で「共同販売」を行うことは可能である。読者との出会いの場を新たに演出することが、ウェブ販売の近い将来の可能性として考えられるだろう。

■ 科学する目 5

雄と雌

青木 淳一

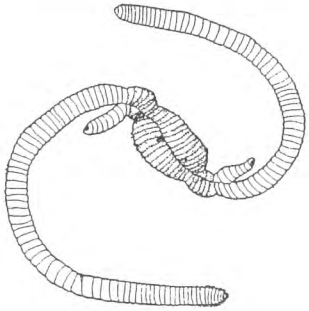
一般には、動物の雄は雌よりも大きくて強いものと思いこまれている。ライオンにしても、クワガタムシにしても、確かに雄は大きくて立派で、力強い。

しかし、カエルの雌の上に乗っかっている雄は小さくて、まるで親が子をおんぶしているようだ。カマキリが交尾している姿を見ても、雄は雌よりもずっと小さく、交尾中に雌に食べられてしまう哀れな存在である。ジョロウグモでは雄の体重は雌の何十分の一にもならないくらい小さい。たった一秒の間にさっさと交尾をすませて逃げないと雌に食われてしまう。ミツバチの社会でも、雌（女王）が巣の中心として永く君臨する。雄（王）は種付けの役が済むと、働き蜂によってたかって殺され、巣の外に放り出されてしまう。

生物界では雌のほうが雄よりも大きくて力強いというほうが一般的なのであり、雄は小さく、か弱く、美しいというのが相場である。「雌雄を決する」などという言葉があるが、生物界全体を見渡したら、こんな言葉は出てこないはずである。人間社会では、最近の男の子がおしゃれをし、なよなよとして男らしくないと嘆くオジサンたちが多いが、本来、雄はか弱く、美しいものである。その点では、人間の男の子は本来の雄の姿を取り戻しているともいえるのである。

ライオンの雄は確かにたてがみも立派で体も大きい。しかし、狩りに出て獲物を捕ってくるのは雌の役目である。雄はただ子どもとじゃれあってゴロゴロしている。人間のお母さんが買い物にいって料理をし、お父さんがテレビを見てゴロゴロしているのと同じである。本来、雄の役目はあまりないのである。

動物には雄と雌があるのが当たり前のように思われがちであるが、実は雄がいない種類の生物もある。ダニ類のなかには雌だけで増え続けていく種がかなりあり、単為生殖とか処女生殖とかいわれる。これは種の分散にたいへん都合が良く、たった一匹の雌が風で飛ばされて新天地にたどりつけば、そこで苦労して雄を探すまでもなく、一人で卵を生み、繁殖していけるのである。もちろん、雄は生ま



雌雄同体のシマミミズの交接
（山口・畑井による）

ず、雌だけを生み続けていく。

人間では性転換というとたいへん興味深い話題になるが、性転換を普通に行っている生物もある。クロダイは若いうちは雄であるが、やがて雌に変身する。若い雄は精子を放った後、雄の生殖器が退化し、代わって卵巣が成熟してくる。したがってクロダイの場合、男としての体験は若いうちだけであり、女としての体験はある程度年取ってからだけとなる。それでも一生の間に男女の両方を体験できるなんて羨ましいという人が多いだろう。

案外知られていないことであるが、ミミズには雌雄の区別がない。つまり、雄のミミズ、雌のミミズといったものがないのである。どういうことかというと、一匹のミミズの体内に精巣と卵巣の両方がある。それなら一匹で受精ができるかというと、そうはいかない。二匹のミミズが体を密着させ、雌の穴と雄の穴をあてがい、互いに精子を送り込むのである。カタツムリも同様で、二匹が角のつけ根にある生殖孔の近くから恋矢と呼ばれる槍のような突起を出し、これを互いに相手の生殖孔に挿入して精子を送り込む。「それは羨ましい」などと言っているのは誰ですか。

一方、雄と雌がまったく出会わないで受精するものもある。土の中に住むササラダニ類では、雄が精子の入った風船のようなものを置いていき、それを雌が探し当てて体内に取り込んで受精する。つまり、雄は雌のために贈り物を置き、いつか雌がそれを拾ってくれることを期待して立ち去っていく。「そんなの、つまらない」と言っているのは誰ですか。

（神奈川県立生命の星・地球博物館館長）

廣池千九郎記念館

私立学校というのは、創立者独自の建学の精神がまずあって、それに共鳴する人たちが協力してできあがってゆくものである。それ故、創立者の精神はその学校にとって最も重要なものとなる。よって、どの私立学校でも、その精神を伝世してゆくための記念館が造られ、それがその学校の「聖地」となる。と同時に、そこには創立者の理想と情熱、つまり志が凝縮されているから、記念館を観ることによって、逆にその学校の志向と特色を知ることができる。

今回ご紹介する「廣池千九郎記念館」がまさにそれで、ここには麗澤大学を含む学校法人廣池学園（大学一、高校二、中学二、幼稚園一）の基礎を築いた廣池千九郎の生涯と思想がいっぱい詰まっている。

この記念館は、千葉県柏市の麗澤大学および財団法人モラロジー研究所を含む広大な園地の中心にある。正門を入って右手の林沿いに行くと、野点にふさわしい庭園があり、そこに溶けこむように記念館が建っている。鉄筋平屋建て、七〇〇平方メートルの建物で、開館は廣池没後二四年の昭和三七年である。内容は、廣池本人の遺品や著書、遺稿、遺墨、写真などを当時の社会情勢の説明とともに立体的に展示しており、それによって廣池の生涯と業績を知り、その志を感得できる仕組みになっている。

廣池千九郎は慶応二年（一八六六）に、現在の大分県中津市郊外の農家に生まれた。人一倍、向学心が強く、苦学力行して小学校教員に、そしてさらに歴史学者として頭角を現し、国家的大事業となる『古事類苑』の編纂に従事、「東洋法制史」の新学問分野を開拓。大正元年には「支那古代親族法の研究」等で東京帝国大学を通じて法学博士の学位を授与されるという偉業を成し遂げた。

旧制中学も卒業していない廣池が独学で学位を得たというので、当時の世間は驚いたが、この研究は廣池の学問の一部分にすぎない。廣池はかねて世界の普遍的な道徳原理を構築しようとして広範な研究を進めていた。しかし、学位取得と

所在地　〒277-8686　千葉県柏市光ケ丘２-１-１
上野駅よりJR常磐線（快速）乗車、松戸駅にてJR常磐線（各停）柏・我孫子・取手行き（地下鉄千代田線乗り入れ）に乗り換え南柏駅下車（約35分）
東京駅よりJR山手線乗車、西日暮里駅にて地下鉄千代田線（柏・我孫子・取手行き）に乗り換え南柏駅下車（約50分）
開館時間　９時～５時
休館日　年中無休（年末年始を除く）
入館料　無料
電話　04－7173－3023

同時に、死の宣告を受けるほどの大病におかされ、この絶体絶命の境地で廣池はみずから精神的な大転換を成し遂げ、以後、困窮している人の心の救済に全精力を傾注するようになった。これはすべて実践活動によるもので、そこでの体験と研究成果が彼の教義体系を確固たるものに仕上げたといわれている。今日「モラロジー――道徳科学」と呼ばれるものがそれである。そして大正一五年、廣池はモラロジー研究所を創立、昭和一〇年には道徳科学専攻塾を開き、これが今日の廣池学園につながってゆくのである。

廣池千九郎記念館は、廣池のこうしたドラマチックな人生を凝縮したものであるが、その中でも一際、目を引くものがいくつかある。

○『新編小学修身用書』（全三巻）――廣池が二二歳、小学校教諭の時に自ら執筆した道徳の教科書。各巻一頁一話で五〇頁ある。

○『支那文典』――漢学研究の副産物ともいえる中国語の文法のテキスト。廣池が早稲田に招かれて教鞭を執ったとき使用したもので、早稲田大学出版部刊。七版を重ね当時の隠れたベストセラーであった。

○昭和七年、当時の侍従長・鈴木貫太郎宛の手紙（写し）――中国大陸にいる日本軍隊の速かな引き上げを具申。手紙の末尾に「この書面、何人にお目にかけても苦しからず候」とまで書いてある。

○新渡戸稲造博士（国際連盟事務局次長）からの書簡――廣池著『道徳科学の論文』に寄せた序文（英文）。先日講演にみえた明石康氏（元国連事務次長）がこれを貪るように読んでおられた。

○「宥座の器」の体験コーナー――孔子の「満つれば覆える」という中庸の教えを実物模型で体験できる。入れる水が少量だと傾き、多過ぎても覆える。ほどほどだと安定する。先般「週刊文春」と「日本経済新聞」で紹介された。

（麗澤大学出版会　多田敏雄）

大学出版部ニュース

▼東海大学出版会が梓会出版文化賞受賞

日本の専門書出版社一一二社からなる社団法人「出版梓会」の第一七回梓会出版文化賞に東海大学出版会が選出された。

第九回以来、毎年受賞候補に挙げられつづけてきたが、今期『日本産魚類検索第二版　全種の同定』『日本近海産貝類図鑑』『ベルツ日本文化論集』などの刊行を機に、これまでの四十数年間にわたる評価と併せて受賞するに至った。大学出版部協会加盟校の受賞は、法政大学出版局、名古屋大学出版会に続いて三校目。

1月17日、日本出版クラブ会館における贈呈式にてスピーチする松前紀光出版部長

▼二五回目の出版五団体合同新年会

二〇〇二年一月二五日、人文・社会科学系出版五団体（法経会・歴史書懇話会・大学出版部協会・国語国文学出版会・人文会）は、都内ホテルエドモンドにて恒例の合同新年会を開催した。

二五回目を迎えた今回も、各団体所属の会員の他、都内近県の書店、取次会社、業界新聞社ら総勢一八二名が出席。当大学出版部協会からは、渡辺幹事長以下、三一名が出席し交歓した。

▼年末例会・懇親会

大学出版部協会の年末例会・懇親会が二〇〇一年一二月五日、日本出版クラブ会館にて開催され、二三校七五名が参加した（当番校／早稲田大学出版部）。

今回は拡大幹事会、編集・営業・刊行助成の各部会、懇親会という恒例行事に加え、「協会未加盟、新設大学出版会との情報交換会」を開催。「大学出版人による活発な議論と友情の確認と新しい交流」という目的を掲げた新たな試みがスタートした。

▼第二〇回編集者の集い

「デジタルデータは誰のものか―デジタル時代の著作権と出版契約」をテーマに、樋口清一氏（社団法人日本書籍出版協会調査部長）を講師に迎え、「第二〇回編集者の集い」が開催された（二〇〇一年一一月二〇日、東京電機大学神田校舎一一号館一七階大会議室）。

会場には協会関係者はもとより、各出版社をはじめ、デジタル・メディア関連の会社、印刷所などから総計五七名が参加。また講演後の質疑応答では、具体的な問いが数多く出され、このテーマがそれぞれの参加者とって立場の違いはあれ、喫緊の問題であることが感じられた。

▼移動編集部会Ⅱ―財務省印刷局見学

二〇〇二年一月一七日、「二〇〇一年度第二回・移動編集部会」が開催された。今回の訪問先は、東京都北区にある財務省印刷局滝野川工場。一般ではなかなかみられない紙幣の印刷現場を見学した。在京の編集部会担当者を中心に一七名が参加。

北海道大学図書刊行会

▼栃内香次・木村純編著『**21世紀の教育像**』（四六判・一八〇〇円）　未曾有の困難に直面している日本の教育問題の現状をふまえ、最近の新しい試みの実践例を含め広く様々な切り口から「教育」を考える。▼木村和範著『**標本調査法の生成と展開**』（A5判・三八〇〇円）　英・米・独・仏・伊・デンマーク・ノルウェーの原典踏査から、キエールからネイマンまでの発展史におけるミッシングリンクに挑む。標本調査理論を巡る国際的論争史をたどり、任意抽出法に対する反省的思索を深める。▼東出功著『**中世イギリスにおける国家と教会**』（A5判・七〇〇円）　膨大な原史料研究の中から「国家と教会との相互補完関係の研究」についての主要な業績をまとめた遺稿集。▼土屋博著『**教典になった宗教**』（A5判・四五〇〇円）　宗教現象における教典の意味を真正面から問う「教典論」が、現代宗教学の忘れ去られた重要課題であることを指摘。教典を、思想のみならずその受容と用法との関連で宗教生活全体の中に位置づけ、動的に捉え直す。聖書学とは一線を画する新たなアプローチ。

聖学院大学出版会

▼クェンティン・スキナー著　梅津順一訳『**自由主義に先立つ自由**』（四六判上製・本体価格二四〇〇円）

今日支配的な自由理解に、トマス・ホッブズに遡る「自由とは政治体制とは関わりない個人的自由である」とする自由主義の「消極的自由」の理解がある。

これに対して今日最も注目される政治思想史研究者のクェンティン・スキナーは、十七世紀のイギリス革命において隆盛を極めた自由理解に注目する。すなわち「自由な国家のもとでのみ、自らの意志に従って行動する自由、他者の権力や意思に従属しない自由」（著者はこれを「ネオ・ローマ的自由」と名づける）こそが真の自由であるとする自由理解を思想史の中から掘り起こし、その現代的意義を論ずる。

今日、政治思想その他の領域において盛んに議論されている自由主義的自由理解、個人的自由を公共的奉仕と結びつける共同体論的自由理解に対して、著者のいうネオ・ローマ的自由理解を第三の概念として対比させる。現代の自由理解に一石を投じた注目の書である。

麗澤大学出版会

▼土屋喬雄著『**日本経営理念史**』〈新装復刻版〉（六〇〇〇円）

本書は、渋沢栄一、大原孫三郎、相馬愛蔵など江戸から昭和初期までの特色ある商人・経営者の人物と志（商道徳・経営理念）を具体的なエピソードで語りつつ、日本的経営理念の生成・発展を学問的に跡づけたもの。ここに集大成された「経営の原理と志」はグローバリズムの現代に一層光り輝いており、現代日本の経営者にとって温故知新の書となろう。

著者（故人）は元東大名誉教授。原書は昭和三九～四二年、日本経済新聞社刊。▼太田文平著『**寺田寅彦――人と芸術**』（四六判上製・二六〇〇円）

幾多の俊秀が集った漱石門下の中でも、寺田寅彦は、師漱石が最も敬愛した人物であり、「何をなしても、将来一流になる男」と評されたという。現実に、彼は物理学者として独創的・先駆的な業績を残しながら、同時に卓越したエッセイストでもあった。本書は、寅彦研究の第一人者が日本科学の青春期を生きた「知られざる知の巨人」の全貌を現代的観点から浮彫りにした傑作評伝である。

慶應義塾大学出版会

これまで一部の著作を除き、読むことが困難であった近代日本の先導者・福澤諭吉の著作を、新編集で刊行。

▼**『福澤諭吉著作集』全12巻**、二〇〇二年一月刊行開始、以降隔月刊。

本著作集は、福澤諭吉の真価が凝縮された重要著作を網羅し、手軽に読めることが狙い。本文には常用漢字・新かなを採用し、むずかしい漢字や読み誤りやすい漢字には豊富にふりがなを付した。さらに理解しにくい語句や福澤諭吉の思想を象徴するキーワードには語注を施し、読みやすさ、分かりやすさに徹した。

変革の時代を生きるための指針を、本著作集の中から受け取っていただきたい。

▼第一回配本／**第3巻『学問のすゝめ』**（二〇〇〇円）

産能大学出版部

▼脇山俊著**『だれでもわかる経済学の常識』**（一八〇〇円）

先の見えない現在の日本の中にあって、経済問題を正しく理解するため教養として勉強したい人、仕事で見聞きする機会があるので実務に必要な程度の知識がほしいと希望する人、知識不足を感じてさらに学んで実務にも役立てたいと希望する人、が読むことを念頭に書き上げている。

したがって、それらの読者が理解できるよう要点をイラストで表現し、経済学を勉強するときに出てくる代数式はできるだけ言葉に代え、専門用語は初歩的なものでも解説して、一歩一歩積み上げながら説明する。また、最近の人々の関心ごとは、不況にあえぐ今の日本がこれからどうなるか、景気、円高等であろう。その要因を理解するために必要な、マクロ経済（国際経済学を含め）も重点的に解説している。

初級レベルから実践応用できる高度な内容まで取り上げているので、本書を理解すれば経済実務の要点を理解できるようになる。

専修大学出版局

▼張文穎著**『トポスの呪力――大江健三郎と中上健次』**（二四〇〇円）

中国吉林省で育ち、都会にでたとき一種の故郷喪失を味わった著者が四国と熊野という二人の作家の故郷を踏査して、トポス（場所）という類縁性を対比しながら論究。トポスの構築を重ねて「壊されない精神」に近づいていった作家の魂に迫る。地方が都市化によって「地方」の顔を失いつつある今日、「故郷」という場所をわれわれはどう考えたらよいのか。

▼大本剛士編**『日本における　エミリィディキンスン書誌（1896－2000）』**（七八〇〇円）

神秘的な深みがあるといわれるディキンスン詩集の編集者だったM・トッドが夫と一八九六年に北海道へ日食観測にきて、そのとき村人に残していった詩集が日本での最初の紹介だといわれている。本書は、これまで日本で発表されたディキンスンに関する資料を編者がほぼ網羅した希少な労作である。（内容）研究書、詩集・書簡集、詩選集、文献目録、辞書・事典、文学史、ハンドブック、書評、論文、無署名記事、学会日誌、索引、他。

玉川大学出版部

▼山岸駿介『**大学改革の現場へ**』（二四〇〇円）「遠山プラン」や「私学に直接助成金」などの政策大転換をどうみるか？大学関係者、新聞などメディア、文部科学省に対する提言・苦言の数々。

▼ホーキンスほか編／三浦逸雄ほか訳『**デジタル時代の大学と図書館**』（四八〇〇円）デジタル技術によって変わる学術コミュニケーションの将来、さらには学問の新しい形式、大学そのもののあり方を論じ、知の再編成の見取り図を描く。

▼玉川学園編『**ISO14001 玉川学園環境管理マニュアル**』（四五〇〇円）総合学園として世界初のISO14001認証取得を果たした玉川学園のマニュアル全文を公開するとともに、各部の実践事例をも紹介。

中央大学出版部

▼園田茂人編著『**現代中国の階層変動**』（二五〇〇円）改革・開放後の中国社会の変貌を、五〇〇〇強の大規模サンプル調査と経験的・実証的データを用いて論じた本格的中国階層研究の誕生。

▼鹿児嶋治利著『**銀行に未来はあるか**』（一七〇〇円）ＩＭＦ体制崩壊後、変動相場制、金融のグローバル化という時代背景の中で市場リスクに対応する金融技術の開発をすすめる銀行の未来を展望。

▼大浦暁生監修・中央大学ドライサー研究会編『**「アメリカの悲劇」の現在――新たな読みの探求**』（三五〇〇円）二〇世紀前半においてアメリカの中にあった貧富の差は現在も世界に拡大しており「世界の悲劇」として読みうる新しさを持っている。『アメリカの悲劇』をとおして「新たな世界の意味」を探求する。

▼林茂樹編著『**情報化と社会心理**』（三五〇〇円）情報化により社会環境や価値観・状況が着実に変わり、人々の意識や心理も変化している。これらの変化を社会生活を眺めることで、顕著な特徴や性格を見出し、情報化を通して現代社会、ひいては現代人の社会心理を分析する。

東海大学出版会

▼“Fishes of Japan with pictorial keys to the species, English edition”（Ｂ５判、三万六〇〇〇円）が刊行される。本書は『日本産魚類検索第二版　全種の同定』の英文版として、日本産魚類三五三科三八六三種の魚類全てについて、その形態的特徴から魚名を同定するものであり、日本の魚類分類学の最新成果を世界に向けて発信する初めての試みでもある。本書は英文表記の統一基準を持たない日本の地名、分布域、水系などに世界基準となりうる英文表記を導入し、今後の魚類学に関する英文論文執筆の底本となりうるものである。

――――――＊――――――

販売は全世界の魚類学関係者に向けてメールによる新刊案内とウェブ販売を、国内読者へはＤＭによる書店・直販併用の販売を行う（『大学出版』52号「出版社によるオンライン販売」参照）。

世界的に例の無い、絵解き検索図説と日本魚類学の最新成果が、そして初の試みである地名表記の統一基準が世界にどのように評価され受け入れられるのか、ウェブ販売の真価が問われる。

東京大学出版会

▼『講座 臨床心理学』（下山晴彦・丹野義彦（編）全6巻）が完結。スクールカウンセラーの全校配置に見るとおり、臨床心理学の実践は、個々のクライエントに対する面接ばかりでなく、その人を取り巻く家族、学校、企業など社会的関係を視野に入れて展開し、同時に新たな科学研究パラダイムの熱い発信源でもある。いまや社会的な責任ある実践の科学として変貌しつつある臨床心理学の現在をはじめて体系的に紹介、臨床心理学の実践者・研究者のみならず、誰もがその潜在的な利用者である実社会にも、深い反響を巻き起こしつつある。1巻「臨床心理学とは何か」、2巻「臨床心理学研究」、3・4巻「異常心理学」Ⅰ・Ⅱ、5巻「発達臨床心理学」、6巻「社会臨床心理学」（各巻本体価格三五〇〇円）。

東京電機大学出版局

▼超伝導現象の発見から九〇年が経つ。一五年前の高温超伝導狂騒のときは、現象と応用、物質と材料が混乱して報道された。リニアモータ、極低温技術、プラズマと核融合発電などその周辺の話題も巻き込んだのは、超伝導が物理、電気・電子の本質をあらわす現象だからだ。研究のすそ野は広く、まだ「超伝導」と「超電導」の使い分けが残る。一方、地道でコンスタントな研究は成果を結んでいる。つい先年も日本人研究者による新しい超伝導物質の発見などがあったが、現在は従来理論のうえに新しい理論が期待される時期となった。▼最新刊の**『超伝導の基礎』**丹羽雅昭著／B5判／四九八頁／五〇〇〇円（税別）は、標準理論が確立されていく過程を数式で追体験しながら基礎を学ぶ。▼既刊の**『超電導工学―現象と工学への応用―』**松葉博則著／A5判／二六四頁／四〇〇〇円（税別）は、主に技術応用について解説。▼同じく既刊の**『低温工学概論―超電導技術を支えるもの―』**荻原宏康編著／A5判／三二四頁／四五〇〇円（税別）は、関連技術である低温工学を解説する。

東京農業大学出版会

〈シリーズ・実学の森〉

▼**『庭園のこころと形―世界名園シンポジウム―』**白幡洋三郎編

庭園の様式・形式だけが扱われるような造形への関心による造園観をこえて、いかに庭園が使われたか、庭園が楽しまれたか、都市とのかかわり、人々のくらしと庭園のつながりに注目して論じられる庭園論・造園論。

平成一三年十月刊／B6判／二五三頁／本体価格一〇〇〇円

〈カラー写真集一〇〇シリーズ〉

▼**『オランダ一〇〇の素顔　もうひとつのガイドブック』**オランダ一〇〇の素顔編集委員会編

榎本武揚が留学したオランダ、交流四〇〇年の今日、日本近代化の原点がここにもある。オランダの自然、文化、農業、榎本武揚のかかわりなど、執筆者のそれぞれのユニークな解説がいい。

平成一三年十二月刊／B6判／一四五頁／本体価格一六〇〇円

▼**『根巻資材の特性』**内田均著

平成一三年十月刊／B5判／一〇六頁／本体価格二〇〇〇円

法政大学出版局

▼清成忠男『21世紀／私立大学の挑戦』大学教育改革が注目されるわりに、大学の現場から発想した本が少ない。法政大学総長である著者は、大学をイノベーションの場としてとらえ、国立大学と私立大学の関係に疑念を投げかける。日本では、研究開発成果の移転がしにくい国立大学に研究資金が流れてきた。他方米国では、研究型の私立大学に資金が集中する。著者はこのアンバランスな研究資金の流れを変え、社会の広範なニーズに対応できる研究型大学をつくるべきだと言う。この意見には大賛成である。（中略）政府への依存体質から脱却し、国際社会を視野に入れた容赦のない改革を断行する決意が必要だろう。そのために、私立大学の総長が何を変えようとして戦ってきたのか。その軌跡を知ることは役に立つ。（讀賣新聞より／竹内佐和子氏評）

四六判・上製
本体1800円

放送大学教育振興会

▼学部開設科目

『心理学初歩』（辻敬一郎・星薫編著）…心理学が対象とする心・心理を探る方法を解説し、意識・行動・個性・社会の諸側面について現代心理学が明らかにしている知見を紹介する。

『現代社会と著作権』（齊藤博・作花文雄・吉田大輔著）…情報の蓄積や送信の技術が次々と開発されるなか、情報の利用形態が多様化してきた。情報の多くは著作権法制の関与するものであり、本書はその未来像に迫るものである。

▼大学院開設科目

『情報システム科学』（長岡亮介著）…今やITは作る側と使う側という新たな〈二つの文化〉的断絶を産み出している。この困難を打開するために、実践的・理論的の両方の視点を総合的に考慮してアプローチする。

『環境マネジメント』（山口光恒編著）…環境問題の対象は、従来の公害問題から、地球温暖化・オゾン層破壊などの地球規模の環境問題に拡大している。これに伴い企業・消費者・政府などの役割に大きな変化が見られる。

明星大学出版部

▼塚田紘一著『子どもの発達と環境――児童心理学序説』二三〇〇円

近世に至るまで、子どもは「大人の小さい者」と考えられていた。しかしながら、ルソー（Rousseau, J-J.）の子どもを中心にすえた児童観によって児童は研究対象になる。ルソーは『エミール』の中で「子どもは大人と違ったもの」であり、不完全な大人としてではなく、子どもとして理解されなければならない存在である」と提言した。大人はかつて子どもだったために子どもの心をあたかも知り尽くしていると誤解していた。その誤解を解き、児童の心理が科学的に研究され始めたのは、わずか百余年前に過ぎない。それから児童心理学は日進月歩に発達する。本書では児童心理の最新情報を解説。（目次―抜粋―）第一章　発達の基本的理解、第二章　児童研究の方法、第三章　発達初期の展開、第四章　身体と運動機能の発達、第五章　認知発達、第六章　知能と創造性、第七章　情緒・動機、第八章　遊び、第九章　社会性、第十章　自己意識、自己概念、第十一章　親の児童観と教師＝生徒間の信頼関係。

早稲田大学出版部

▼**『循環型社会の未来―リサイクルの行方―』**（早稲田大学・朝日新聞社国際フォーラム編、21世紀国際フォーラム1、二六〇〇円）環境負荷を抑えて、エネルギーや資源の効率的な利用方法を探る。

▼**『介護と家族』**（山中永之佑・竹安栄子・曽根ひろみ・白石玲子編、シリーズ比較家族第Ⅱ期4、四二〇〇円）法律、歴史、ジェンダーなどの観点から、高齢社会の介護の問題点を捉える。

▼**『平和研究　第26号―特集　新世紀の平和研究―』**（日本平和学会編、三二〇〇円）文明、人権等をテーマに平和の価値を問い、平和研究のあり方を考察。

▼**『都市・記号の肖像』**（森常治、六五〇〇円）生活空間であり、事件を発生させる空間でもある都市の様々な現象を分析し、新しいパラダイムを追究する。

名古屋大学出版会

▼阿部泰郎著**『聖者の推参―中世の声とヲコなるもの―』**（四二〇〇円）〈聖なるもの〉を生成する声、反語する笑い。「遊者」から後白河院、花山院、文覚に至るまで、宗教と芸能、王権と物語のあわいに立ち「推参」する者を通し、中世世界を動かす深層のダイナミズムに迫る。

▼長谷川博隆著**『古代ローマの自由と隷属』**（一五〇〇〇円）ローマ人とはいかなる人々であったのか？　農業や牧畜など「なりわい」に基づく諸関係を、家・社会・国家の三層において捉え、ローマ人における支配と結合のあり方を照射。

▼マルク・ラエフ著　石井規衛訳**『ロシア史を読む』**（四二〇〇円）該博な知識に基づく的確な問題把握とトータルな叙述によりロシア史の理解を一新。汎ヨーロッパ的視点に立ち、紀律国家の展開による近代化の姿を輪郭鮮やかに描出。

▼久馬一剛編**『熱帯土壌学』**（五八〇〇円）これまで包括的に論じられることのなかった熱帯アジア、アフリカ、中南米の土壌について、第一線の研究者らが詳述。熱帯での農業開発と環境保全の調和のための道筋を探る。

京都大学学術出版会

▼東洋史研究叢刊之五十九**『中国思想史の研究』**島田虔次著・一五〇〇〇円／儒学史を核とする中国思想史の泰斗・故島田虔次の輝かしい足跡を標す最後の論文集である。陽明学左派を論じ、名著『中国に於ける近代思惟の挫折』を補う「中国近世の主観唯心論について」をはじめ、単行書には未収載の学術論文19篇と書評・シンポジウム講演録など近世以降の中国思想を多角的に論究した計22篇を収める。50年余にわたる島田儒学思想史の全容が解明される。

▼講座・生態人類学（第3回配本）第5巻**『ニューギニア―交錯する伝統と近代―』**大塚柳太郎編・二八〇〇円／底湿地、急峻な山麓、中央山脈に沿った盆地、そして周辺にはサンゴ礁に囲まれた島々。地形の違いだけでなく、七五〇もの言語に代表されるように、人びとの文化も成業も多様性に満ちている。そのうえ、「伝統」はさまざまなかたちで押し寄せる「近代化」の波にもまれている。それぞれがユニークな五つの社会での長期にわたる調査から、ニューギニアの人びとの生き方に迫る。

大阪経済法科大学出版部

▼**『哲学と現代―二十一世紀の哲学思想の展開のために―』**岩崎允胤著／四八〇〇円／第一編　現代の哲学思考（現代日本の政治、経済、文化、思想の哲学的課題への総括的論究）…哲学と現代／現代日本の唯物論哲学／弁証法と自由の問題／日本の思想状況／哲学断想。第二編　自然科学と弁証法（素粒子論・量子論・宇宙論等、現代自然科学の発展にかんする弁証法の諸問題）…中国東北師範学校自然科学系における講義／膨張宇宙論と自然観発展の歴史／補遺　運動する物質。

▼**『永世中立と非武装平和憲法―非武装永世中立論研究序説―』**澤野義一著／四五〇〇円／憲法第九条の平和主義に最も適合的な安保政策は非武装永世中立であるという観点から、戦後日本の永世中立論を総括し、外国の永世中立国の中立政策を比較法制論的に考察、日本の自衛権・安保外交政策を検討し、第九条に適合的な平和保障の課題を提示する。現代における永世中立（論）の概況と課題／現代の永世中立国と平和保障政策／日本における永世中立論／日本国憲法と自衛権および自衛隊海外派兵論。

大阪大学出版会

▼〈大阪大学新世紀セミナー〉として次の三冊を刊行。いずれも、A5判・九六頁・本体一〇〇〇円。村上富士夫・藤田一郎・倉橋隆**『脳の神秘を探る』**、津田葵**『コミュニケーションの日米比較』**、村川英一**『熟練技能の継承と科学技術』**

▼湯浅邦弘編著**『懐徳堂事典』**　町人学校として知られた懐徳堂の人物・書名・事項に図版一五〇枚以上を添えて項目別に紹介。大学創立七〇周年記念で作製されたバーチャル懐徳堂の図書版。A5判・二七三頁・本体二八〇〇円

▼〈薬学部創立五〇周年記念刊行〉米田該典**『大阪とくすり』**　道修町がなぜ日本で有数の薬問屋になったのか。製薬の技術と流通の変遷、現代の医薬分業・薬害など薬の問題にも言及する。A5判・一五〇頁・本体一五〇〇円

関西大学出版部

▼杉原四郎著**『日本の経済思想史』**（三五〇〇円）近代日本の経済思想史を展望しうるように、関係諸論文を収録・配列したもので、既刊『日本の経済学史』の姉妹篇となる。明治以降の日本経済思想史を『東京経済雑誌』や『東洋経済新報』『国家学会雑誌』などの代表的経済雑誌を軸にしたうえで、田口卯吉や福田徳三、河上肇、飯島播司、平生釟三郎といった主要なエコノミストを取り上げ、後進資本主義国日本に特有な経済思想史の特質を考察した。

▼角山幸洋著**『綿繰具の調査研究』**（三八〇〇円）綿繰具は、木綿の綿毛を綿実と分離する木綿生産に必要不可欠の道具である。日本へは木綿の導入とともに、中国から技術が伝播した。使用範囲は全国に広がり、熱帯植物の北限にまで及ぶ。調査にあたっては、実測図を作成するという考古学的手法を取り入れている。その結果、数少ない文献だけでは得ることのできない分野に多くの新知見をもたらした。また、アメリカから日本へ導入された綿繰器械についても考察を行っている。

九州大学出版会

▼『ヘルダー　旅日記』（嶋田洋一郎訳、A5判・五八〇〇円）十八世紀啓蒙主義の大きな時代思潮の中を旅するドイツ知識人の姿を鮮明に伝える。最新のヘルダー研究の成果を踏まえた詳細な訳注、また書簡、説教、詩などの資料を収めた『旅日記』の決定訳。

▼鏑木政彦著『ヴィルヘルム・ディルタイ―精神科学の生成と歴史的啓蒙の政治学―』（A5判・四七〇〇円）「謎の老人」とよばれた十九世紀ドイツの哲学者、ディルタイ。本書は、その思想の発展を初期から晩年に至るまで、哲学のみならず歴史学や教育学、政治社会思想を包括的に考察。邦訳全集が出版され始める思想家ディルタイの全体像を、細分化する研究状況に抗して描き、その時代に迫る。

▼田畑博敏著『フレーゲの論理哲学』（A5判・六二〇〇円）本書は「論理学は数学の青年時代であり、数学は論理学の壮年時代である」ということを実証しようとしたフレーゲの栄光と挫折を追跡し、この論理主義の主張が部分的に正しいことを、実際に論理学から算術を導出することによって確認する。

東北大学出版会

▼諸岡道比古著『人間における悪』（A5判、二九〇頁、四三〇〇円）

人は何故悪をなすのか。悪とは何なのか。古来人間はおのれの生と悪の関わりに悩み傷つき、この問いを自問し続けてきた。著者は、主として宗教学的関心から、カントとシェリングという二人の哲学者の思想およびその展開を丹念に跡づけ、ドイツ観念論における悪の根拠・根源とその克服に関する問題に明晰な光を投げかける。

▼水原克敏編『自分―私がわたしを創る―』（A5判、二八八頁、一〇〇〇円）

本書は、東北大学一年生を対象としたゼミの記録（二〇〇一年四月～七月）で、先輩等の話題提供と受講生の感想文や意見文から成っている。ゼミの中で「私がわたしを創る」ことの中に自分があるという共通認識をもつことができた。私はわたしであることの基点を確認し、「わたし」の挫折や願いを深く受け止め、そこから「新しいわたし」を創り出す、この営みが自分である。大切なのは、自問自答によって、自ら学ぶことである。自分について悩んでいる青年達の必読の書。

流通経済大学出版会

▼（近刊）『税制の経済学』塚本健・河野惟隆・朱思林著

本書は、主要資本主義5カ国（日米英独仏）と社会主義国中国の税制の変化、EU諸国間の税制調整の動きを、各国の戦後の資本蓄積、経済発展との関連で考察している。即ち、G5と中国が戦後の経済復興と発展のため、また国際競争力強化のためにどのような経済政策、租税政策を必要としたかを、各国の資本蓄積、世界市場における地位の変化との関連で明らかにしている。

具体的には、各国の経済発展の状況に応じて、どのような租税政策が要請され税制がどのように改正されたかを実証的に考察し、さらにその租税政策、税制改革がいかに資本蓄積促進の役割を果たしたか、あるいは社会政策的役割を果たしたか、租税政策の政策効果を確認する。

そのために本書は、各国の財政法、租税法の改正を平易に詳しく解説すると共に各国の資本蓄積、景気循環、経済統合の事実分析に多くの頁をさいている。

三重大学出版会

▼田中皓正著『**日振島のはなし**』
B5判六六〇頁、本体四万五〇〇〇円
ISBN4-944068-48-4 C1021

平安時代に藤原純友の反乱の舞台となった豊後水道の孤島「日振島」の歴史。神話の中の日振島、藤原純友の考察、近世領国の形成、庄屋清家の領有と、資料を踏まえて、時代順に叙述されている。

主として資料の制約から、明治以降の日振島の歴史に焦点がある。宇和島市からの定期航路の開設、電気・水道の設置、港湾・道路整備、漁業設備の充実、村長清家遜の活躍などが、具体的に記述されている。

特に吉村昭作『海のネズミ』の舞台となったデラ台風、ネズミ騒動前後の日振島の漁業生活のすさまじさは、数字を調べ、写真を貼付して迫力に富む叙述になっている。

人物的には、十六歳で単身米国に密航し、財を成した社会改良家、森岡天外翁とその薫陶を受けた離島の青年達の島作りの活動が戦略的で興味深い。

関西学院大学出版会

▼木野光司著『**ロマン主義の自我・幻想・都市像―ホフマン文学の独創性と現代性の研究**』
（A5上製・四四〇頁・予価六〇〇〇円）

▼紺田千登史著『**フランス哲学と現実感覚―そのボンサンスの系譜をたどる**』〈関西学院大学研究叢書〉
（A5上製・三四〇頁・予価七〇〇〇円）

▼片寄俊秀著『**商店街は学びのキャンパス**』
（四六並製・二二四頁・予価二二〇〇円）

▼山路勝彦責任編集『**植民地主義と人類学**』
（A5上製・六〇〇頁・予価一二〇〇〇円）

近刊予告

▼田村和彦著
『**魔法の山に登る**』

▼田和正孝・他著
『**アジアの都市誌**』〈ダイアログ型講義録〉

好評既刊

▼阿部潔・石田淳著『**ダイアローグで学ぶ基礎社会学**』〈ダイアログ型講義録〉
（A5並製・二二六頁・二六〇〇円）

ウェブサイト委員会ニュース　http://www.ajup-net.com/

▼本誌では「ウェブ上の大学出版部」と題して、三八号（九八年夏）では一四大学出版部、四三号（九九年秋）では三大学出版部のウェブサイトをご紹介いたしましたが、現在では二二の出版部がサイトを開設しています。それぞれに特徴ある形式と内容のサイトですので、本誌とあわせ、ぜひ定期的にご覧下さいますよう、おすすめいたします。各出版部へは、協会サイトの「私たちの仲間」からリンクしています。

▼なお、協会サイトへのご意見・ご要望は、mail@ajup-net.com 宛にお願いいたします。

〈書籍の表示価格は税別です〉

■もう何十年にもわたって、さまざまな書類の職業欄には「編集者」と記してきた。「編集者とは何か」の議論が好きな人に言わせれば、僕など編集者の内には入らないのかも知れないが、仕事の内容がかなり曖昧であっても、自分が編集者であると宣言すれば通用してしまうのがこの職業の値打ちである。何たって免許はいらないのだ。

■僕のことはさておき、一口に編集者と言っても、いろいろなタイプがあるように思う。企画の面で言えば、攻撃型と受身型だ。攻撃型とは、とにかく喋りまくり、著者を自分の土俵に引き込んで、自分が書かせたいものを、相手にも書く気にさせてしまうタイプである。それに対して受身型は、相手の話を引き出し、その中から、相手が本当に書きたいものは何かを見つけだすタイプといえよう。

■どちらが正しいか、という問題ではない。時の話題を追いかけて、急いで本にしなければならないとしたら、攻撃型でなければ通用しないだろう。しかし、大学出版部のように、きわめて専門的な内容の本であれば、まずは書き手自身が、その研究に、その著作に、どれほどの情熱を持っているかを感じ取ることが編集者には求められるのだろうと思う。編集者はそれぞれの学問の専門家ではないし、専門書の場合、「ないものねだり」は不毛であり、許されないのだ。

■製作実務の面で言えば、校正型と割付型がある。校正型は、正字と俗字の区別、送り仮名の統一などには気をつかうが、表組みのレイアウトは、「文字10級、罫線はオモテ」程度で済ませてしまったりする。これに対して割付型は、正字と俗字の混在などはさほど気にしないが、表組みは一こまごとの幅、罫線とのアキまで、厳密に計算して指定しないと気が済まないタイプである。本文中の引用にしても、校正型が「二字下げ」と書いてすました顔をしているのに対して、割付型は、本文13級の二字下げなのか、引用文12級の二字下げなのか、半端は字割で処理するのか、ケシタを空けるのか、考え始めると夜も眠れなくなってしまう（ウソです）。

■僕もどちらかと言えば割付型の人間に属する。したがって校正は得意ではない。写真のトリミングなどをやっていれば、どんなに時間がかかっても苦にはならないが、校正を始めると頭痛が始まり、ついで強烈な睡魔に襲われる。しかし、校正も仕事の一部であることには間違いないのだから、「俺は割付型だ、文句あるか」と、居直るわけにもいかない。いまさら遅いかも知れないが、校正を得意とする人たちに学ぶ必要はあるだろう。そしてたぶん、校正について学ぶということは、校正の「面白さ」を学ぶということなのだろう。結局の所、面白くなければ何をやったってダメなのだ。

■では、プロの校正者たちは、いったい何が面白くて校正という仕事をやっているのだろうか。それを知るための格好のリーフレットがある。日本校正者クラブ機関紙『いんてる』がそれである（年三回発行）。インテルとは、活版の時代に、活字の列と列の間に行間として挟んだ金属製あるいは木製の板のことをいう。おそらく、校正という仕事の「合間」というような意味で名付けられたものだろう。

■執筆者は、エディタースクールの講師を務める校正者で、辞典研究家としても知られる境田稔信氏、新潮社校閲部の小駒勝美氏が中心だが、それ以外の執筆者を含めて、このリーフレットからは、校正という仕事の奥深さ、そして面白さが伝わってくる。一般には手に入りにくいリーフレットなので、次回はその内容について、もう少し詳しく紹介したいと思う。（更生者）

製作の現場から［27］

人生いろいろ 編集者もいろいろ

デジタル出版最前線［5］

文字は紙と仲が良い

■インターネットによる電子書籍の配信実験が行われていた頃、日本文藝家協会が「活字のたそがれ」と題したシンポジウムを開催した。「使いたい文字がワープロにない」のは「JISによる漢字文化の破壊」である。だから、「漢字を救え」といったヒステリックな意見もあった。誤解もあるとはいえ、出版メディアの急速な変化に対する、作家たちの不安の現れだったのだろう。今やインターネットは常時接続時代となり、ナップスター問題のような著作物の違法な流通が常態化した。でも有料コンテンツの配信はどれも実験段階である。では「活字はたそがれていく」のだろうか。

■活字を「紙にインクで刷られた文字」とすれば、総量はともかく役割の低下は間違いない。だって電子メールで膨大な量の文字が流れているのである。新聞や本などの「紙の上の文字」とケータイやパソコンなどの「ディスプレイ上の文字」で、一日にいったいどちらを多く読んでいるだろうか。僕は間違いなく後者である。一時、通勤電車の往復を電子メールやメルマガを読むのに費やしていた頃がある。おかげで老眼がドライアイと仲良く一緒にやってきた。

■「本がなくなるか」はさておいても、絶対に「文字はなくならない」。それどころか、ものすごい勢いで増え続けている。インターネットに流れる文字（コード）を紙でやりとりしようとしたら、世界の森林資源を瞬く間に使い尽くすことだろう。仕事の内容はかなり変わるとしても、今後も出版社や編集者の役割がある、と信じているのは文字は不滅だからである。

■メールをプリントアウトして読んでいる人も多いと思う。電車の中でウェブサイトやメールのコピーにアンダーラインを引いている人をよく見る。でもその文字の列にある種の読みにくさを感じることと思う。それは書籍の組版に当たるものが不在だからである。白いスペースに版面と呼ばれる本文の領域を決め、文字の大きさ、文字数、行数、行間と〈更生者〉氏が夜も寝ないで昼寝して割付をしていく。それを明文化しようとすればゆうに大部の本となるさまざまな組版ルールのもとで活字が組まれているのである。

■ソフトウェア工学にトランスペアレント（透明）という用語がある。ソフトやハードの存在が利用者に気づかれない、つまり文字通り透明になっているという意味である。例えば電話は誰でも容易にかけることができ、その存在も忘れて話に夢中になれる。これは電話の完成度が高くトランスペアレントだからである。同様に小説を読む際、その物語世界に没頭できるのも高度な組版技術が黒子で働いている。紙と高精細な印刷技術は、現時点で最高の「読書装置」を作り出しているのである。

■さらに紙は目にやさしい。軽く薄く電源はいらず、保存が可能である。一方、ディスプレイはデジタル情報を直ちに表示し、書き換え可能で省資源である。その両方の長所をあわせ持てば、すばらしい読書装置となることは請け合いである。そんな虫の良いことを目指して開発されているのが「電子ペーパー」である。ペーパーとはいっても試作品を見る限りでは、まだまだ電子装置の域を出ない。とりあえず写真で紹介してあとは次回としましょう。（電子ペーペー）

電子ペーパー（写真提供／凸版印刷）

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会
060-0809 札幌市北区北９条西８丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

聖学院大学出版会
362-8585 上尾市戸崎 1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

麗澤大学出版会
277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会
108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3454-7029

産能大学出版部
158-0082 世田谷区等々力 6-37-12（3月18日より）
TEL 03-5760-7801 FAX 03-5760-7804

専修大学出版局
101-0051 千代田区神田神保町 3-8-3 専修大学４号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

玉川大学出版部
194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部
192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東海大学出版会
151-0063 渋谷区富ヶ谷 2-28-4 東海大学校舎内
TEL 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870

東京大学出版会
113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局
101-8457 千代田区神田錦町 2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会
156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局
102-0073 千代田区九段北 3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

放送大学教育振興会
105-0001 港区虎ノ門 1-14-1 郵政互助会琴平ビル３F
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482

明星大学出版部
191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部
169-0071 新宿区戸塚町 1-103
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

名古屋大学出版会
464-0814 名古屋市千種区不老町１名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

京都大学学術出版会
606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部
581-8511 八尾市楽音寺 6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会
565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部
564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

九州大学出版会
812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172

東北大学出版会（準会員）
980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-225-2029

流通経済大学出版会（準会員）
301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

三重大学出版会（準会員）
514-8507 津市上浜町 1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

関西学院大学出版会（準会員）
662-0891 西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL 0798-53-5233（内線 3475） FAX 0798-53-9592

大学出版 五二号（二〇〇二年春）二〇〇二年三月一日発行 頒価一〇〇円（千共）発行所＝大学出版部協会 ISSN 0913-3305
〒一一三―八六五四 東京都文京区本郷七―三―一 東大構内 東京大学出版会内 電話〇三（三八一二）二一一一（内線八七九五五）E-MAIL：mail@ajup-net.com URL：http://www.ajup-net.com/